私がラオスで見つけたもの

木村　萌

世の中にあふれている青年の国際交流事業の中で、このプログラムの特にすばらしいところは、参加者に何度も「自分はなぜここにいるのか」を問い直させる点だと思う。私自身、選考から帰国後研修に至るまで、幾度となく何を成し遂げたくてここに参加しているのかを考えた。選考の時には曖昧だった気持ちが、事前研修で目標を話し合う時には少し明確になり、行きの飛行機でもう一度考え直した。ラオスを出るころにやっと、自分の中に納得のいく答えを見つけた。そしてこの報告書で、もう一度考えたことを整理できる。まだ終わりではない。きっとこの先もラオスでの日々について、日本という国について、そして自分自身について考え続けていくことになるのだと思う。

率直に言えば、私をこの場所へ連れてきたものは、焦りと悔しさだった。始まりは去年の夏。英語で他のアジアの学生たちとディスカッションをするプログラムに参加し、普段は偉そうなくせにいざとなると全く勇気が出ない自分に不甲斐なさを感じた。同時に、知らぬ間に自分が大学の内向きで安住しがちな雰囲気に染まっていることに気が付き、「私は数年後どうなっていたいのか」と本気で考え始めた。とりあえずこの劣等感と不安を払拭したいと思い、やみくもにいろんなことに挑戦し始めた矢先、一番心を惹かれていた夏のプログラムの選考に落ちた。強い憧れがあり、本気で選考に臨んだので、かなり悔しかった。だからこの国際青年育成交流事業に申し込むことにしたのも、正直なところその代替としてという気持ちだったのだ。

プログラムが終わった今は、この事業に参加しラオス派遣団の一員になることができて、ベストだったと思う。訪問地はどれも個人旅行ではいけないようなところばかりで、国の仕組みやラオスの人々の考え方を一か月を通してじっくり知ることができた。政府の方、大学生、大使館の方、JICAやNGOで働く日本人、ホストファミリーなどありとあらゆる視点からラオスについての話を聞くことができた。その中には共通認識もあれば、他の人の話と矛盾した話もあった。たとえば、「ラオスは社会主義に向いていない。社会主義政党らしきものがあるだけで、実情はいわゆる社会主義国家からは程遠い」という話を日本国大使館の方から伺ったが、ラオス政府の方とお話しすると外交上では社会主義国家とのつながりを強く意識している様子だったし、環境政策についてお話しされているときに言語統制の影を感じる瞬間があった。また、ラオスは日本のような国家を目指してどんどん経済成長を進めるべきだと考える人もいれば、経済発展にとらわれず伝統的で自然豊かな暮らしを大事にしたいと考えている人もいた。今持っているラオスへの印象は、最初のラオスのイメージよりも複雑であり、「ラオスってどんな国？」と聞かれた時に一言で答えるのが難しくなってしまった。だが、それだけラオスの多様な側面を目にし、厚みのある実感を持てたということだと思う。日本の国内が一枚岩でないように、ラオスもまた一枚岩ではない。異なる角度から見れば、異なるラオスの形がある。当然のことだけれど、それを母国以外で身をもって知ることができたのは貴重な体験だった。これからもいろんな視点からラオスの情報を集めていきたいと思う。

また、ラオスをよく知れば知るほど、日本についての考察が深まったことも収穫の一つである。ラオスは発展途上国であり、内陸国で開発に難題もあるとはいえ、伸びしろだらけの国家だ。経済発展という面から見れば、様々な可能性を秘めている。さらに、資本主義的な文脈での「発展」以外の発展や幸福の在り方を探る道も残されている。一方の日本は、紛れもなく先進国だ。衛生環境もテクノロジーもサービスも優れているけれど、「日本の未来は明るい」と言い切れる人はなかなかいないのではないか。「いかにして発展していくか」よりも、むしろ「いかにして維持していくか」、あるいは「いかにしてスピードダウンしていくか」という視点で国の在り方を考えていかねばならない状況にあるように思う。どっぷり資本主義的発展に身を浸した日本が、今更経済成長を放棄することも難しい。将来を考える上で、ラオスという国にとって「正解」の政策にはいろいろな形があり得るけれど、日本にとって「正解」といえる政策は存在しうるのだろうか。そう考えると、私はラオスにある種の羨ましさを感じてしまう。

ラオスの生活を実感する中でも日本の将来を考えさせられる瞬間があった。ホームステイの時である。家には時計が一つもなく、自家食用に鶏を飼っており、トイレ

は水桶を使うタイプのものだった。ホストファザーは自分の暮らしを愛していたし、「日本には行ったことがあるけれど、busy過ぎて長く住みたくはない」と言っていた。たしかに東京は窮屈だ。私も東京の喧騒があまり好きではない。ラオスでメコン川の流れをぼんやり眺めていると、あらゆる規則や視線から解放されたような気持になる。ラオス全体を覆う「ボーペンニャン（問題ない）」の空気感と、自然を排除せずに暮らしている姿は、ある面では日本人の憧れかもしれない。しかし、ラオスにいる間、私はあらゆる点で「不便だ」と感じたし、「衛生的でない」と感じる瞬間も多々あった。特に虫が嫌いな私は、外にいるときには常に虫との間に緊張を感じていた。東京の人混みを嫌がり、無機質に機械化された空間よりも自然や人とのつながりを愛するふりをしながら、一方では無菌状態を好み、便利さを追い求めている自分に矛盾を感じた。そして、きっとそれは私だけではない。個人差はあれ、みんな少なからずラオスの自然や心の余裕に憧れを感じつつ、どこかで不快感や違和感があったのではないかと思う。私たちの世代の日本人は、みんなTokyo病だと思う。「キレイ」と「便利」を当たり前の前提として生きている。自然を必要としながら、自然と共存できない。いったい私たちが本当に求めていることは何なのだろう。日本はどこを目指して進んでいけばいいのだろう。日本が好きで、国のために働くことも考えている身だからこそ、今まで以上に真剣にこの問いを考えていきたいと思った。今後は政治や経済に関する授業をとり、新聞を今まで以上にしっかり読み、もっと日本についての知識を深めるところから始めたい。

そして最後に、この一連のプログラムを通じて得た最大のものを述べたい。それは自己信頼感だ。先ほども述べたが、私は去年の夏からずっと不安や焦りや劣等感と戦い続けてきたように思う。大学に入っていきなり自由と責任の中に放り出され、得意だと思っていた英語が苦手だと思い知らされ、自分より若くてもしっかり夢や志を語れる人がいることに嫉妬を感じ、挑戦する前から面倒になって諦めてしまう自分の性格に自分でがっかりした夏。一年間、何とか納得のいく自分になりたくて多くのことに挑戦したけれど、なかなか思ったとおりにいかないことが多かった。優秀な人にたくさん出会えた反面、自信をなくす瞬間も多かった。このプログラムを終え、やっとその気負いから解放された気がする。

私は事前研修の時から、プログラム中は勇気を振り絞ろうと決めていたので、しつこいくらいに手をあげ発言した。現地に行って最初の表敬訪問で質問したときにはうまく英語が話せず落ち込んだけれど、それをきっかけに、せめてこの期間中は邪魔なプライドをどこかに捨ててしまおうと決心できた。そのうちだんだんと冷静に質問できるようになり、意味のあることや本当に知りたいと思ったことを聞けるようになったと思う。

最後の週にラオス国立大学の学生とディスカッションをする機会があった。ディスカッションは、私がこのプログラムに参加した大きな目的の一つだったが、自分の期待以上のものを得られた。去年のトラウマがあったので、また何もできずに終わるのではないかと内心かなり緊張していたのだが、今回は逆に他の人にいかに参加してもらうかという点が難しかった。自分の意見を言うと、ファシリテーションや全体を見回す役割も任され、上手く役割を果たせず、他のメンバーにイライラしてしまう瞬間もあった。最後の方はまとめるのも難しくなり、ばらばらに議論が進んでいくので、本当に発表を行えるのかと非常に不安になった。しかし、私から力が抜けたことで逆に他のメンバーが貢献してくれるようになり、発表はそれなりに成功した。副団長からも発表を褒めていただけて、率直に嬉しかった。この時、自分が不安に感じている時も、他の人の話を聞き、流れに乗ればうまくいくものだということを学んだ。また発表後に、チームメイトが本当に喜んで「Thank you for everything!!」と言ってくれたことも、心に響いた。ディスカッションはやはり、積極的に参加した方が楽しい。

そして、Farewell Partyの日、私はスピーチをした。パーティーのために浴衣に着替えている時にいきなり、ユースリーダーに「今日、スピーチやる？」と聞かれたのである。結構重要な場で行うスピーチなのに、原稿を考える時間が30分ほどしかなかったので不安を感じたが、「ここでやらないなら、私は何のためにここにいるのか」と思い、引き受けた。結果として、このスピーチが私にとっての集大成となった。スピーチの内容は割愛するが、「一人でも二人でも本気で聞いてほしい」という一心で話した。特に、私が一番伝えたかったのはラオス派遣団の日本人メンバーだったので、終わった後に数名から「泣きそうになったよー」と言われたのはとても嬉しかった。私としても、去年からずっと胸の奥にあったつっかえが取れたように感じ、非常に心地良かった。同時に、この1年間のがむしゃらさが報われたように感じ、自然な自信を得ることができたと思う。

プログラムが終わった今は、次の目標を定めて徐々に再びエネルギーを燃やしていきたいと考えている。せっかく成長を感じているのに、ここで満足して終わってしまってはもったいない。今まではとりあえず挑戦することを目標にしてきたけれど、これからは選んで絞って挑戦し、成し遂げることに目を向けていきたい。そしてその質を高めるために、英語にしろ国際情勢にしろ国内の

ニュースにしろ、もっと知識を増やさねばならないと感じている。国家公務員を目指すのであれば幅広い教養が必須であるし、この春からのドイツ留学を考えるとドイツ語の勉強も必要だ。蓄えて蓄えて、次の挑戦に備えようと思う。また、ラオス派遣団には周りを見る能力の高い人がたくさんいて、他人にも目を向けられる、余裕のある人間になりたいと感じた。この点は、リーダーとして持つべき素質であるにもかかわらず、自分に欠けている部分だ。今後は自分個人の目標達成ばかりでなく、集団全体を見られるよう努めていきたい。

最後に、このプログラムに関わり、私に成長の機会をくださった全ての方に感謝したい。本当にありがとうございました。

ラオス国立大学にて伝統文化の保護についてディスカッションをした後、グループメンバーと